

リンパ節転移を伴う犬の皮脂腺上皮腫の1例

長峯栄路¹⁾ 小菅弘章²⁾ 二瓶和美¹⁾ 大川内充輝¹⁾ 内田和幸³⁾

Eiji NAGAMINE Hiroaki KOSUGA Kazumi NIBE Mitsuteru OKAWAUCHI
Kazuyuki UCHIDA

12歳、去勢雄のシー・ズーにおいて、左後肢内側下腿部皮膚に皮脂腺上皮腫の再発が認められ、腫大した左鼠径リンパ節に転移巣が確認されたため、病理組織学的に左鼠径リンパ節への転移を伴う悪性皮脂腺上皮腫と診断した。本症例では、有糸分裂像の数（高倍率10視野）が他症例の皮脂腺上皮腫と比較して多く認められたため、有糸分裂像の評価は転移率の有用な指標になると考えられた。また転移を伴う犬の皮脂腺上皮腫の報告は、本症例を含めて再発症例のみであり、十分なマージンの確保などの再発予防が重要であると思われた。

キーワード：犬、皮脂腺上皮腫、リンパ節転移

はじめに

動物のWHO分類において、皮脂腺由来の腫瘍は組織学的特徴および悪性度により、皮脂腺腺腫、皮脂腺導管腺腫、皮脂腺上皮腫、皮脂腺癌に分類されている[1,2]。皮脂腺上皮腫は、基底細胞様の皮脂腺芽細胞の増殖を特徴とし、低悪性度ながら稀にリンパ節転移を伴う場合があるとされているが、転移病変を伴う犬の皮脂腺上皮腫の報告はほとんどなされていない[1,2]。今回、鼠径リンパ節への転移を伴う犬の後肢に発生した皮脂腺上皮腫に遭遇し、病理学組織学的に検討したので、その概要を報告する。

症例

症例はシー・ズー、去勢雄、12歳、体重6.15kg。

治療経過：左後肢下腿部内側皮膚に腫瘤が形成され、切除生検により皮脂腺上皮腫と診断された。腫瘤切除から6ヶ月後に同部位に再発病変が認められ、左鼠径部皮下にも腫瘤性病変が確認された。これら再発病変および鼠径部皮下腫瘤を切除し、病理組織検査を実施した。

病理検査所見：左後肢内側皮膚腫瘤において、表皮の一部は潰瘍を呈し、好中球などの炎症細胞の浸潤を伴っていた。真皮では、増殖境界が概ね明瞭な腫瘍巣が形成され、皮脂腺の芽細胞由来の腫瘍細胞が豊富な線維性結合組織で小葉性、胞巣状に区画されながら、シート状充実性に増殖していた。腫瘍細胞は類円形～多角形あるいは紡錘形で多形性を示

し、核は大小不同を呈する類円形～楕円形、核小体は概ね明瞭であった。腫瘍巣内では、豊富な泡沫状脂肪滴を細胞質に含み、皮脂腺細胞への分化を示す腫瘍細胞が散在性に観察された。腫瘍細胞の異型性は中程度～高度で、核分裂像が多数観察された。腫瘍細胞の明らかな脈管侵入像および浸潤性増殖は認められず、サージカルマージンも明瞭であった。左鼠径部皮下腫瘍は腫大した鼠径リンパ節であり、リンパ節実質の大部分は、上記と同様の所見を示す皮脂腺の芽細胞由来の腫瘍細胞の増殖巣で置換されていた。転移巣では、原発巣と比較して皮脂腺細胞への分化を示す腫瘍細胞は少なかった。

考察

成書において、逸話的に頭部に発生する皮脂腺上皮腫は稀に所属リンパ節への転移を伴うとされているが、現在までに転移が認められた犬の皮脂腺上皮腫の報告は、中枢神経系および肺への転移を伴う口唇原発の皮脂腺上皮腫の再発症例1例のみであり、病理組織学的にも悪性の皮脂腺上皮腫は分類されていない[1-3]。本症例において、腫瘍の主体を構成するのは皮脂腺芽細胞様の腫瘍細胞で、皮脂腺上皮腫の典型的な組織形態を示しながら増殖し、腫大した鼠径リンパ節においても同様の組織所見を示す腫瘍細胞の増殖巣が認められたため、鼠径リンパ節への転移を伴う悪性皮脂腺上皮腫と診断した。本症例において、腫瘍細胞の増殖様式、核の異型性、リンパ球浸潤などの生体反応、皮脂腺細胞への分化程度などの組織学的特徴は、一般的な皮脂腺上皮腫のものと違いは認められなかったが、有糸分裂像の数（高倍率10視野）は他症例の皮脂腺上皮腫と比較して、多く認められた。有糸分裂像は腫瘍細胞の増殖活性を反映するものと考えられており、多くの犬の腫瘍において予後との関連性が報告されている。今回の検索から、犬の皮脂腺上皮腫の転移のリスクを考える上で、有糸分裂像の評価は有用な組織学的指標となることが示唆された。また転移を伴う犬の皮脂腺上皮腫の報告は、本症例を含めて再発症例のみであり、転移のリスクを減らすためには、十分なマージンの確保などの再発予防が重要であると考えられた。さらに病理診断の際には、有糸分裂像の評価と合わせてサージカルマージンおよび脈管侵入像の有無についても詳細に検索する必要があると、マージンが不十分であれば拡大切除も考慮すべきであると思われた。

参考文献

- 1) Goldschmidt MH, Hendrick MJ: Tumors of the skin and soft tissues. *Tumors in Domestic Animals*. Mueten DJ ed, 4th ed, 45-117, Iowa State Press, Ames (2002)
- 2) Goldschmidt MH, Dunstan RW, Stannard AA, von Tscharner C, Walder EJ, Yager JA: Sebaceous and modified sebaceous gland tumors. *Histological Classification of*

Epithelial and Melanocytic Tumors of the Skin of Domestic Animals. Second series, vol 3. 26-28, Armed Forces Institute of Pathology American Registry of Pathology, Washington, DC (1998)

3) Bettini G, Morini M, Mandrioli L, Capitani O, Gandini G: Central nervous system and lung metastasis of sebaceous epithelioma in a dog. *Vet Dermatol*, 20(4), 289-294 (2009)

1) サンリツセルコバ検査センター：〒213-0032 神奈川県川崎市高津区久地 2-5-8 日本動物高度医療センター内 3F

2) 小菅獣医科病院：〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川 3 丁目 9-1

3) 東京大学獣医病理学教室：〒113-8657 東京都文京区弥生 1-1-1



図 1 左後肢内側皮膚腫瘍



図 2 左鼠径リンパ節

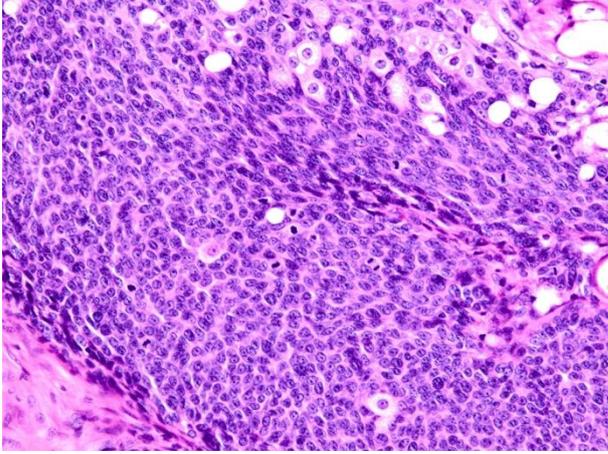


図 3 左後肢内側皮膚腫瘍の皮脂腺上皮腫 (HE 染色)

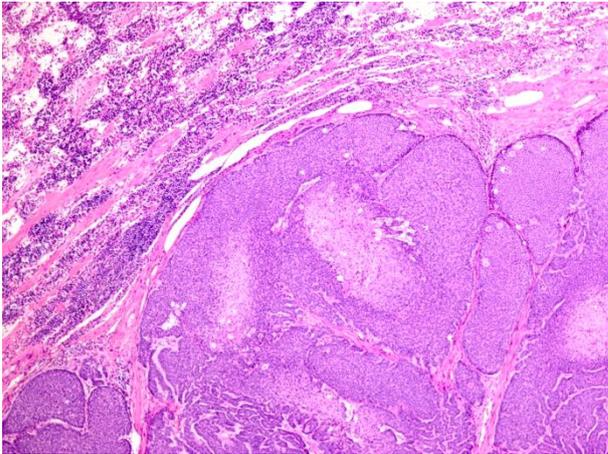


図 4 皮脂腺上皮腫の左鼠径リンパ節への転移 (HE 染色)